

NEW ヒライ信


VOL.2
NO. 90
(第190号)



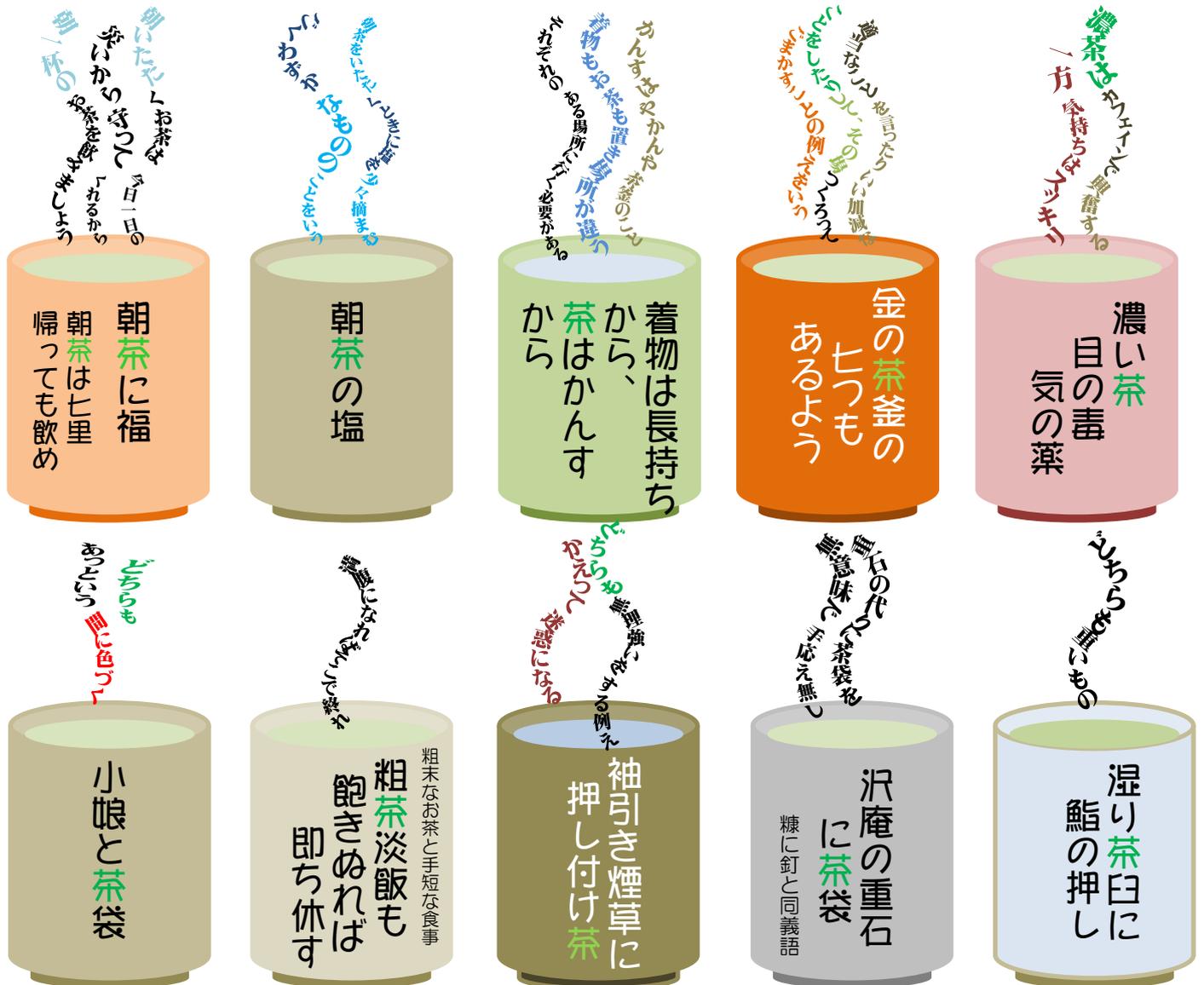
がくしゅう 楽習塾 塾長 平井 たかお 幸雄

hiraisin@par.odn.ne.jp

へそが（で）茶をわかす？ へーそ〜

新茶の季節である。夏も近づく八十八夜。郷里の静岡から新茶が届いた。お茶を飲みながら、お茶にまつわる諺を並べてみた。お茶を一服飲みながら・・・お茶が教える人生訓・・・Tea 茶？お茶にまつわることわざは、無茶苦茶、目茶目茶あるものだ。だから、多〜いお茶！・・・か？

参考文献「伊藤園」http://www.ocha.tv/words/ka_01/、三省堂「大辞林」旺文社「成語林」故事ことわざ慣用句

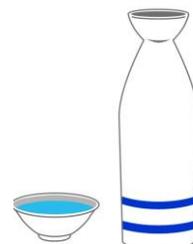


酒は酒屋に、 茶は茶屋に

その道のことは、専門家に任せるのが一番だということの例え。

餅は餅屋と同義語

私の父は酒屋の小僧、母は茶屋の女中
その間に生まれた私は目茶苦茶
ごちゃごちゃ



↑ 抹茶を挽く時に使う石臼
は、廻ると挽きが重くなる。
また、船用の重しも重い物。

原産地・インドのチャウル地方の名に由来。



ちやうじま
茶守縞
琥珀織りに似た、軽くて薄い絹織物の一種。江戸時代、男袴の生地として重宝しました。



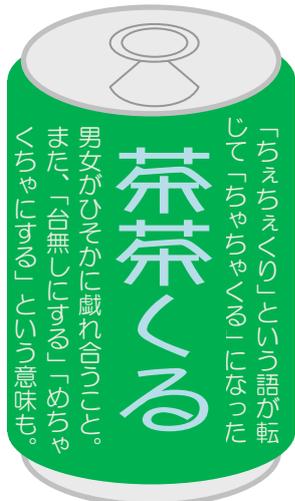
ちやうつけ
茶請け
お茶をいただく時に添えられる、茶菓子や点心



ちやぼうず
茶坊主
貴人の家で茶事全般を担い、来客対応や接待をした人



ちやうすげい
茶臼芸
「茶臼」を叩いて「こぼこぼ」の音を指して「こぼこぼ」の音を指して「こぼこぼ」



「ちやちやくる」という語が転じて「ちやちやくる」になった
茶茶くる
男女がひそかに戯れ合うこと。また、「台無しにする」「めっちゃくちゃにする」という意味も。



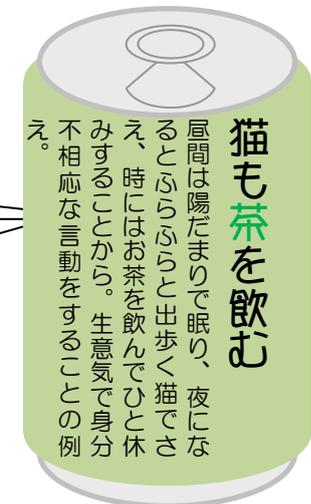
真面目な話を冗談っぽく言うこと。
茶化す
その冗談に無理矢理結びつけて、ごまかしたり、騙したりすること。



暇で時間をもて余しており、手持ちぶさたな様子。
お茶を挽く
芸者や遊女などにお客様がつかず、暇な時に抹茶挽きをさせていたこと由来。



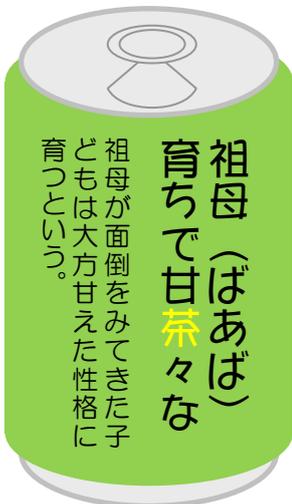
「煩悩消滅」「五臟調和」「臨終不乱」「正心修身」「睡眠自除」
茶の十徳
「朋友和合」「悪魔降伏」「諸天加護」「無病息災」「父母孝養」



猫も茶を飲む
風間は陽だまりで眠り、夜になるとふらふらと出歩く猫さえ、時にはお茶を飲んでひと休みすることから。生意気で身分不相応な言動をすることの例え。



宵越しの茶は飲むな
お茶はいれたてが一番おいしい。ひと晩経過した物は、酸化により品質が低下して、飲まない方がよいという。



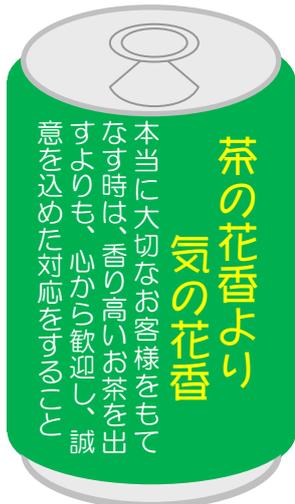
祖母(ばあば)育ちで甘茶々な
祖母が面倒をみてきた子どもは大方甘えた性格に育つという。



濁酒も茶よりは勝る
たとえ濁酒(どぶろく)のような安い酒でも、酔わない茶よりはました、ということ为例え



臍が茶を沸かす
茶ん茶ら可笑しい「どびん・ちゃびん・はげちゃびん」
おかしくてしょうがないこと。ばかばかしくて仕方がないことのため。



茶の花香より気の花香
本当に大切なお客様をもちます時は、香り高いお茶を出すよりも、心から歓迎し、誠意を込めた対応をすること



茶柱が立つと縁起が良い
広く吉兆と言われています。他人に話さず隠しておく方がよいとの説もあります。



まだまだあります「茶」に関する言葉、ことわざ

<p>茶掛けに大幅無し</p> <p>茶室に掛けられる書画などの掛け物は小さい方が良いと言われており、そこから「大きい物は必要ない」という意味</p>	<p>お茶を挽く (茶をこく)</p> <p>暇で時間をもて余しており、手持ちぶさたな様子。芸者や遊女などにお客様がつかず、暇な時に抹茶挽きをさせていたことに由来します。</p>	<p>薄酒も茶よりは勝り、醜婦も空房よりは勝れたり</p> <p>薄いお酒でもお茶よりは良い。たとえ美人でなくとも、女房がいないよりはいた方が良くという意味です。</p>
<p>良い茶の飲み置き</p> <p>品質が良いとされるお茶は、いただいた後も香りや旨みがずっと口の中に残るという。</p>	<p>割った茶碗を ついでみる</p> <p>割ってしまった茶碗を慌てて継ぎ合わせようとしても無駄なように、もつとつしようもないことわかっていながら諦めきれないことの例えです。</p>	<p>茶殻も肥になる</p> <p>茶殻のように捨ててしまう物でも、植木にやれば肥料になるように、世の中にまったく役に立たない物はないということを指した言葉です。</p>

ちゃかのこ
茶鹿子 茶色を帯びた鹿の子絞りのことです。

茶歌舞伎 「きき茶」とも言います。茶道の七事式(※)の一つで、銘を伏せた二種または数種の茶を飲み味わって銘を当てる遊戯のことです。※七事式(しちじしき) 茶道の精神修練を目的とした稽古のこと。他に、数茶(かずちゃ)、廻花(まわりばな)、廻炭(まわりすみ)、且坐(さざ)、一二三(いちにさん)、花月(かげつ)と呼ばれる物があります。

茶 粥 煎茶の汁に冷や飯と塩を入れて炊いたお粥のこと。近世、京都や大坂でよく食べられており、奈良の茶粥は特に有名です。

茶 巾 茶道にて、茶碗などをぬぐう際に用いる布巾のこと。素材は朝鮮照布や麻布が多く、長さ一尺幅五寸(約30センチ×約15センチ)が通常サイズと言われています。

茶巾捌き 茶の湯における、「茶巾」の捌(さば)き方や扱い方のことです。

ちゃ こと
茶 事 お茶をいただきながらお菓子などを食べ、あれこれと当たり障りのない話に興じること。また、父母やご先祖様の忌日にお茶を煮るなどして、親類や知人を招く席のことを表します。

茶酒盛り 宴に興じること。また、お酒の代わりにお茶を飲みながら行われる宴会。井原西鶴の『男色大鑑』には「茶酒盛りを始め、『二度代を取り、かいけいの恥を』と謡ひながら」という表現で出てきます。

茶座敷 「茶室・茶席」のこと。お茶を立てるお座敷のことを指します。

茶 師 茶葉そのもの、またはお茶を挽いて製造した抹茶を売る人。または、その業者のこと。近世では、将軍家御用達の業者に限って、こう呼ばれていたようです。

茶 式	茶の湯の作法や法式の総称。室町幕府の八代将軍・足利義政が相阿弥(そうあみ)、真阿弥(まあみ)、珠光(じゅこう)、利休(りきゅう)らを召して定められたもので、天正のころに利休が大成したと言われています。
ちゃ しゃく 茶 杓	お抹茶をすくう細いさじ。竹製のほか、象牙や木地、ベッコ甲、金属製などがあります。持ち手部分から先端に向かって「切り止め・追取(おっとり)・權先(かいさき)・露」などの名称がついているほか、「珠光形・利休形」などの形式があります。
茶 人	「ちゃじん」または「さじん」と読みます。 一般的に、茶道に通じた人や茶の湯を好む人のこと。また、普通の人とは違って一風変わったことを好む人のことです。
ちゃ せん 茶 筥	お抹茶を立てる時に、茶をかき回して泡立てたり、練ったりするために用いる茶道具の一つ。素材は、煤竹(すすたけ)や白竹、青竹など。三寸(9センチ)ほどの竹筒の半分強を細く割りさき、その末端を内側に曲げた物です。
茶筥売り	お抹茶を立てる時に用いる茶道具の一つである「茶筥」を売り歩く人のこと。自ら茶筥を作り、鷹の羽根や千鳥模様の衣を着て行商していました。また、「鉢叩き」という念仏信仰のこともこう呼びます。
茶筥髪	室町末期から江戸初期ごろに多く見られた男子の髪型。頭頂で束ねた髪を、組み緒や元結などでぐるぐる巻き上げて先端部分だけを残します。 この形が茶筥に似ていることが語源です
茶筥師	茶筥を作る職人のことを指します。 作るだけでなく、行商も自ら行っていたようです。
茶 台	お茶をお客様に出す時に、茶碗をのせる台のこと。 現代で言う「茶托(ちゃたく)」を指します。主に漆器で、円形の台に脚がついた物や、つばのある物、平たい物などいくつかの種類があります。
ちゃ たう 茶 湯	お茶を煎じ出した飲み物のこと。仏前・霊前に供える煎茶など。禅家においては、忌日などに仏前に供えるお茶と湯を指します。飲み物としてだけでなく、薬や居眠り防止にも使われていました。
茶湯天目	仏前に供えられる、茶湯用の天目茶碗のこと。 井原西鶴の浮世草子『好色五人女』には、「明ければ鑊鉢鉦(たくばちかね)を手水だらひにし、お茶湯天目も飯の飯椀となり」というくだりで登場します。
茶道坊主	「茶坊主」「おさどう」とも言います。室町から江戸時代のころ、貴人の家で茶事全般を担い、来客対応や接待をした人。剃髪(ていはつ)し、みな坊主頭だったと言われています。
茶出し	いわゆる「急須」のことで、お茶を煎じるために湯を入れる取っ手のついた器を指します。もともとは中国で、お酒の燗をした小さい鍋のような物をこう呼んでいたそうです。
茶立虫	俳句における秋の季語として用いられます。 茶立虫(ちゃたてむし)類の昆虫の総称で、体長は5ミリ程度。

黄灰色をした虫で、羽根を使って飛び回ります。障子などに止まっては腹を紙にこすりつけ、サッサッという音をたてるのが特徴です。

茶々をいれる 誰かが話しているところに割り入って、邪魔をしたり、ひやかしたりすること。悪気があってすることではなく、冗談でからかうことを指す時に用います。

茶漬けに香の物 お茶漬けと香の物（漬け物）といった、極めて粗末な食事のことをこのように言い表します。そのほか、サラサラしている物の例えとしても用いられます。

茶漬けにひしこの望み 「ひしこ」とは、カタクチイワシのことを指します。

お茶漬けのおかずとして、せめて「ひしこ」くらいはいただきたいというような、ささやかな望みを表したことわざです。

茶 壺 茶葉や製茶した物を入れて保存・運搬するための壺のこと。多くは陶器製。妊婦さんのぽっこりした腹部を、「茶壺を抱いたよう」という言葉で表す

茶づる お茶漬けをすすって食べること。

「茶漬け」を動詞に活用させた江戸ならではの言葉です。

茶と百姓は絞るほど出る

かつての日本では、年貢のために百姓が過剰な労働を強いられていた時代がありました。これはその頃の様子を例えてできた言葉で、茶袋を絞るほどにお茶が出るのと同じように、百姓は責めるほどに年貢や油などを出すという意味です。

茶に浮かされた癪癪持ち（かんしゃくもち）

人を裏切っては何度も寝返ったり、あちらこちらに心移りすることを、洒落て言ったもの。癪癪（かんしゃく）もちの人がお茶にのぼせてしまい、寝苦しく何度も寝返りを打つことが語源です。

茶に酔うたふり

お茶を飲んだだけでお酒など飲んでもいないのに、酔っぱらった振りをしてはぐらかしたり、素知らぬ振りをしたりして、他人からの追及を逸らそうとすることです。

茶の会（ちゃのえ）

招待客にお抹茶を立て、その後会席料理などのご馳走をふるまう席のこと。室町時代の初期は、いわゆるきき茶をして賭物（かけもの）を取る享樂的な物として行われていたようです。

茶の木の下の頬かぶりして通るよう

何度もいれて、もう香りも残っていないお茶のこと。

また、煎茶の味が薄いことを指します。

茶の子

お茶をいただく時に合わせていただく茶菓子やお茶請（う）け。

また、彼岸会などの仏事で供えられる団子や野菜などの供え物のこと。

ものごとの容易な例えとして「お茶の子さいさい」などと用います。

関連：お茶の子さいさい

茶の子煎る（いる）と心がわかる

米を煎って作った「茶の子」と呼ばれるお茶請（う）けの煎り加減によって、その人の気質や心理などがわかってしまうという意味です。

茶の十徳

お茶をいただくことにより、十の徳が得られるという意味。

「諸天加護（しよてんかご）」「無病息災」「父母孝養」「朋友和合」「悪魔降伏」「正心修身」「睡眠自除」「煩惱消滅」「五臓調和」「臨終不乱」の十徳とする説。

茶の初穂を飲むと憎まれる

「茶の初穂」最初にいれた香味豊かなお茶（煎茶や番茶）のことを指します。

これを飲むと憎まれてしまうという俗説から、このように言われるようになった。

茶の花香より気の花香

本当に大切なお客様をもてなす時は、香り高いお茶を出すよりも、心から歓迎し、誠意を込めた対応をすることの方が重要であることを説いています。

茶の間

お茶の仕度をする茶室や、家族で食事や団らんに使う部屋のことを言います。

また、武家で雑用全般をこなす奉公人「茶の間女」の略語としても使われます。

茶飲み

茶の湯の師匠や茶人、また茶の心得がある人のことをこう呼びます。

お茶をただたくさん飲むことや、その人のことを指すこともあります。

この場合、多くはお年寄りを指して言います。

茶飲み伽（ちゃのみとぎ）同義語茶飲み友だち、茶飲み仲間

お茶をいただきながら談笑する友人のこと。お年寄りの気の置けない間柄を表すことが多いようです。年者いた後に迎えた妻を指すこともあります。

茶の湯

茶道の別称。お抹茶を立ててもてなす会合や作法のこと。

利休が詫茶として大成した後、大きく「表千家・裏千家・武者小路千家」という三家に分かれて現在に至ります。

茶の湯者（ゆしゃ）

茶の湯の宗匠となって、暮らしを立てている人。茶の湯の専門家、茶人のこと。

また、お茶会などでふるまわれる料理を心得ている人を指すこともあります。

茶の湯は貧の真似（ひんのまね）

茶の道は「侘び」の心が基本にあるとされています。その心を理解できない者が、派手なことを嫌って貧乏の真似ごとをしているようだと言われたことわざです。

茶は是（これ）眠りを釣る釣り針

醒睡笑（せいすいしょう）という笑話集の一説にある言葉で、お茶をいただくことは、睡魔に負けないために最良の方法であることの例えです。

※醒睡笑 {せいすいしょう} 江戸初期の咄本（はなしぼん）。安楽庵策伝著。

元和9年（1623年）成立。戦国末期から近世にかけて語られていた笑話を全編42に分類、集大成したもの。

茶は水が詮（せん）

「詮」には、なくてはならない大事な物や肝心な物という意味合いがあります。

おいしいお茶を立てるためには、良い水を選択することが大事であるという教えです。

茶 腹

「茶腹も一時」という使い方が一般的です。お茶をたくさんいただいた時の腹加減のこと。お茶をいただくだけでも一時の空腹はしのげることから、わずかな物でも一時しのぎになることの例えで用います。

茶腹も一時

一杯のお茶を飲むだけでも、しばらくは空腹をしのげるものです。

少しばかりの物でも、一時しのぎの助けになるということを表現した言葉です。

茶 番

来客の際に、お茶の用意をしたり給仕をしたりしてもてなす役のことです。

また、「茶番狂言」のことを「茶番」ということもあります。

茶番狂言

江戸時代に流行した滑稽な素人寸劇。始まりは、江戸歌舞伎の楽屋で行われた物とされています。手近な物を材料にして、仕方や手振りで演じられていました。すぐばれるような下手な芝居の例えにも使われます。

茶は屋根葺き（やねぶき）ほど飲む

屋根ふきの職人はお茶ばかりをがぶ飲みしていて、たいして仕事をしないということを表しています。他に「屋根ふきの茶飲み」などとも言われます。

茶挽き草（ちゃひきぐさ）

俳句の世界で夏の季語として用いられる茶挽き草（ちゃひきぐさ）は、「烏麦（からすむぎ）」の別名。爪の甲の部分に唾液をつけ、実をのせて息を吹くと茶臼を挽くように回ることからこの名が付けられました。

茶挽き坊主（ちゃひきぼうず）

読んで字のごとく、茶臼を使って茶葉を挽く坊主のこと。多くは盲人だったとも言われ、主人の留守中に作業をさせられていたとか。

「茶挽き」「茶引坊」「茶引座頭」などいくつかの呼び方があったようです。

茶柄杓（ちゃびしゃく）

茶道具の一つ。釜から湯をくみ取る際に用いる竹製の小さなひしゃくです。

「切り止め」と呼ばれる竹の持ち手の先端部分の切り口で、「炉用」「風炉用」を見分けることができます。

茶 瓶

今で言う「やかん」を指します。茶葉を入れて煎じる時に用いる銅器や土瓶。

近世では、貴婦人が物見遊山に出かける際に茶弁当を担いで同行した男のことを指していました。

茶瓶頭

銅器でできた茶瓶のように、ツルツルした坊主頭のこと。

「やかん頭」「はげ頭」「きんかん頭」などとも呼ばれていました。

茶 袋

製茶する前の茶の葉を入れるための紙袋。

また、お茶を煎じ出すために用いる布製の袋のことです。

茶 船

近世、大坂に多く見られた飲食物を販売するための小舟。

また、大型廻船の荷物運送用の小さい川舟のこと。「うろうろ船」とも言います。遊山用に屋形造の舟もあったと言われています。

茶船差し

近世、大坂に多く見られた飲食物を販売するための小船「茶船」に乗る船頭さんのことを指します。

茶振る舞ひ

お茶だけで、食事やお酒を一切出さない、簡素なもてなしのこと。

女同士が集まる場合によく行われていました。

茶弁当

茶の湯に用いる道具が納められた木箱のこと。茶碗などを入れるための「茶箱」とは別物です。近世、物見遊山や旅行に出かける際に、茶道具一式と弁当を担ぐために使った用具も、こう呼ばれました。

茶箒（ちゃぼうき）

茶の湯の席で、風炉や炉、釜の蓋（ふた）といった茶道具についたちりなどを払う際に用いる、小さな羽根ぼうきのこと。「茶掃き羽」などとも呼ばれています。

茶焙じ（ちゃほうじ）

番茶を焙じる時に使う道具のこと。柄のついた曲げ物の底部分に、紙や金網や紙が張られています。

- 茶坊主 室町から江戸時代における武家の職名の一つ。茶の湯の作法や茶道具の目利きから、登城した大名の案内、茶や弁当の世話までを務めました。多くは剃髪（ていはつ）・僧衣姿。転じて、権力者におもねる人を悪罵（あくば）してこう言います。
- 茶屋「茶葉屋」とも言います。
製茶を販売する店や家のこと。寺社の境内や街道沿いなどで、お客様に茶を出してひと休みさせた店。「芝居茶屋」「相撲茶屋」のことを略して、こう呼んだりもしていました。
- 茶屋小屋 江戸時代のころ、新吉原で遊女屋などに遊山客を案内することを業としていた家、または遊女などを抱えていた家のこと。「色茶屋」「遊山茶屋」「引き手茶屋」などとも呼ばれていました。
- 茶屋酒 料亭やお食事処などで遊興して楽しみながら飲むお酒のこと。
また、遊山客が茶屋小屋で遊びつつ飲むお酒のことです。
- 茶屋染め 染め模様の一つ。白地に藍の濃淡を使って花鳥や山水など四季が表現されており、小袖などに使われました。寛永年間ごろに始められたと言われ、武家の上流の女性が夏の帷子（かたびら）に用いていました。
- 茶屋柄（ちゃやづか）を握る 茶屋小屋遊びが上手になることを指します。
- 茶屋辻 さらし布を藍染めし、模様を表した茶屋染め的一种です。素材は麻。鹿の子絞りを入れたり、色系を使った刺繍が施された物など凝った加工の物もあります。
- 茶屋の餅も強いねば食えぬ
お茶がメインの茶屋では、すすめられなければ餅は食べにくい。
そうしたことから、「商売のコツはすすめ方にある」ということを説いた言葉です。
- 茶屋坊主 お客様にお茶を立てて販売している店の主人。頭を丸めていたことから、「茶坊主」と呼ばれたりもしましたが、本来の「茶坊主」とはまったく別の意味です。
- 茶 山 お茶の木を植えた山のこと。また、その山で茶摘みをする事。
俳句では、春の季語として用いられ、「信楽や茶山しに行く夫婦連」などと詠まれています。
- 茶湯子は眼に入れても痛くない
「茶湯子（ちゃとうご）」は、末っ子という意味があります。
末っ子または年をとってからできた子どもは、親にとってかわいくてたまらないということを表しています。
- 茶 利 「ちゃり」と読みます。ふざけたり、おどけたりすること。また、滑稽な文句や言動、おどけた動作の総称。滑稽な語り方やおどけた演技そのものを指すこともあります。
- 茶利場（ちゃりば）
歌舞伎や人形浄瑠璃において、「茶利」と言われる滑稽な言動やおどけた動作、芝居が演ぜられる場面のこと。『一の谷』の宝引の段などが特に有名です。
- 茶碗と茶碗 茶碗と茶碗は、ほんの少し触れ合うだけで音がして、互いに欠けてしまう。
このことから、不仲な間柄や、性格の似すぎた者同士は傷つけ合いやすいことを例えています。
- 茶碗に箸を立てると人が死ぬ 同義語ご飯に箸を立てると不幸がある
仏教では、お葬式の際にご飯の中央に箸を立てて死者にお仕えすることから、日ごろは忌（い）み避けられます。食事作法の戒めとして使われる言葉です。

茶碗の尻を手につける

「離れない」という意味です。江戸時代、太田全斎により編集された俗語辞典「俚言集覧」に『茶碗の尻を掌に付る』と出てきます。

茶碗の中の針を磁石で回すよう

自分以外の何かにつられて回る様子の例えとして使われます。

もし、茶碗の中に針があって、それが回っていたとしても、針がひとりで回ることはなく、あるとすれば磁石に引き寄せられ、つられて回っているのだ、という意味の言葉です。

茶碗の飯粒がきれいにとれたら雨になる

経験から生まれたとされる「気象占い」の一つ。

空気が湿っていて茶碗から飯粒がはがれやすいと雨が近いという意味です。

茶碗を投げば綿で抱えよ

「もし茶碗を投げつけられるようなことがあれば、割れぬよう綿で受け止めよ」という意味から、相手が強気な物言いをしてきた場合などはあえて柔和な態度で受け止めた方が有利になるという教えです。

茶碗を箸で叩くと貧乏神が来る

「茶碗を叩くと地獄の鬼が寄ってくる」「茶碗を叩くと餓鬼（がき）が寄る」などとも言われます。茶碗を箸で叩くことは行儀が悪く、マナー違反であることをうたった戒めの言葉です。

茶を硯水（けんすい）にを使えば書き置きとなる

すすりにお湯やお茶をいれることを忌む俗信の一つです。

「お茶ですった墨を使って書いた文書は遺書となり、それを書いた人は死ぬ」などと言われていました。

茶を立つ

お抹茶を立てること。器に入れた抹茶に湯を注いで、茶筌（ちゃせん）でかき混ぜて泡立たせることから、このように表現しました。

また、仏事や法事をとり行う場合にも「茶を立つ」という言葉を用います。

塀き臼（つきうす）で茶漬け

大は小を兼ねるという言葉がありますが、大きな搗き臼が小さな茶漬け碗の代わりになるわけではありません。そこから、どんな物にもそれに適した物があるということを表しています。